

# 新・マリアの父親

たくきよしみつ

父は鰻屋の職人だった。

厨房に案内された僕は、樽の中で絡み合うように泳いでいた鰻が、父の手によって割かれ、蒲焼きになるまでの一部始終を見た。

記憶にある限り、命が食物に変わる過程を見たのはそれが初めてだった。

そしてつい数分前まで生きていた鰻の肉を口に含んだ途端、自分も鰻も同じなのだという現実を舌の先を通して学んだ。

それ以後、僕は少しずつこの世界に同化していった。

自分もあの鰻と同じで、首に太い釘を打ち付けられれば今すぐにも死んでしまう存在なのだ。そう認めるのは怖かったけれど、大人になるにつれ、その恐怖を直視せずに生きる術も身につけた。

「世界」はやっぱり存在するのだろうし、僕の周囲の人間たちも、人形ではなく、それぞれ僕と同じように意識し、生きている。

世の中が、テレビのニュースで言っているようなものなのだろうということも素直に信じたし、この国の教科書が教える「世界の歴史」の内容にも、何ら疑いを抱かなかった。

そうして、僕は順調にこの「石油文明社会」の一員に成長していった。

しかし、その同化の仕方は間違っていた。

子どもの頃、他のすべての人間が死んでも、自分だけは不死なのだと思おうとしていた時期がある。

レントゲン写真を撮ってみると、自分の身体は人間ではなくて、サイボーグだと分かるのではないか。あるいは、神様が僕だけを特別に選び、奇跡を約束してくれているのではないか。

少し成長すると、今度は、世界中で本当に生きているものは自分だけで、周囲に見えるすべてのものは神様が僕に見せている幻影なのではないかと疑うようになった。

「世界」は自分の周囲数キロ半径しかなくて、その外側は空っぽ。僕が東へ五メートル移動すれば、「世界」も僕と一緒に五メートル移動する。自分以外のすべての人間は、神様が僕のために創った人形で、本当に生きて「存在している」のはひとりだけ。

そうした幻想が消えたのは、小学校入学後まもなく、初めて父の職場に足を踏み入れたときだった。

僕は今、「世界」の真相について、再び疑いを抱き始めている。僕が知っていたつもり、「世界」は、情報の集積でしかない。そして情報は無気質な現実ではなく、ある種の「意志」を持つことがよくある。

そんな簡単なことに、「従順な社会の構成員」たちは気づいていない。

僕にそのことを気づかせてくれた二人の教師について、これから語ろうと思う。

時間は一九八八年に遡る。

僕の間ではほんのちよつと前のことだが、まだ、携帯電話もデジカメもなかった頃だ。

## I

「イルカとの対話集会」コミュニケーション・ウィズ・ザ・シー」と題されたその妙な集会は、高知県の土佐岬で行われた。

岬の突端近くに小さな砂浜がある。アカウミガメの産卵地ということになっていて、一応は観光ルートにも入っているのだが、もう夏休みも終わり、浜を訪れる人はほとんどいなかった。

集会の主催者は「山彦塾」といい、奇抜なパフォーマンスを通して自然保護や反原発を訴える集団としてマスコミでも最近

注目を集めている。

彼らが、なぜこんな時期にこんな場所を選んだのかは分からない。その話を聞いたときは、はたして人が集まるのだろうかという疑問がまっ先に浮かんだ。

しかし、僕が海岸に着いたときには、すでに結構な人が集まっていた。その数、およそ百人というところだろうか。中には取材記者らしい人たちの姿もあった。

波打ち際を背に作られたステージでは、最近ではあまり見かけなくなった半袖のサファリジャケットを着た若い男が、原発の危険性について熱弁をふるっていた。

僕は目立たぬように聴衆のいちばん後ろに加わり、砂浜に腰を下ろした。

男の話は小一時間続いた。ようやく話が終わると、司会役らしい、長いストレートの髪の女性が現れ、少しこわばったような笑顔でアナウンスした。

「それではここで、山彦塾の塾頭・山幸彦による、イルカとの音楽対話を行いたいと思います」

ヤマサチヒコと呼ばれた、顔の半分を髭で被われたその男は、ステージの上に立つと、マイクの前で、おもむろにオカリナを構えた。

予期していたよりもやや甲高い、硬質な音が海岸に流れ出した。

PA装置を通したためにオカリナ特有の音の丸みが消えてしまっているのが残念だったが、音楽としてはそう悪くないものだった。

メロディを追いかけていると、波打ち際から十メートルほど離れた海面で、ふいにイルカが一頭ジャンプした。砂浜に座っている観客から小さなどよめきが起きた。

さっきの女性が言った「イルカとの音楽対話」というのはこういうことらしい。

しかし、イルカは別にオカリナの音に引き寄せられて沖からやってきたわけではない。よく見れば、海岸に沿って十数メートル四方の生け簀が造っており、最初からそこに「用意」されていたものだ。

髻男はそのイルカのほうを向き、大袈裟なジェスチャーで、語りかけるようにオカリナを吹き続けた。

イルカが何度か短く声を発した。ステージから少し離れた波打ち際では、トレーナーらしき「黒衣」が、控え目な動作でイルカに合図を送っている。

「サブちゃんも大変やなあ」

そばで独り言のような呟きが聞こえた。

声の主は、僕の斜め前方に座っていた細身の男だった。その隣には、連れらしき若い女が、両手を腰の後ろに突き、足を投げ出して座っていた。

男の向う側なので顔はよく見えなかったが、すらりと伸びた手足の白さと、緩やかなウェーブがかかった、ポリウレームのある黒く長い髪が目を引いた。

僕は一瞬にして彼女に強い興味を持った。

サテン地のような紺のワンピース。その腰から下は砂にまみれている。

彼女はステージには目もくれず、イルカの姿だけを追っていた。

山幸彦のオカリナ演奏が終わらぬうちに、彼女はマリオネットのようにふわりと立ちあがり、海に背を向けて歩き始めた。

一瞬見えた横顔は、想像していた以上に整っていた。

僕の彼女への興味は、はつきりとときめきに変わっていた。

連れの男は彼女の背中を目で追いながら、シャツの胸ポケットから禁煙パイポのようなものを取り出してくわえ、うまさうに二、三回息を吸い込んだ。

海では、イルカがまた哀切な声を上げた。それに合わせ、男は軽い溜め息をついたが、席を立つ気配はなかった。

もしかしたら、この男はたまたま彼女の隣に座っていただけで、二人は何の関係もないのだろうか。

僕はゆっくり立ち上がると、女を追う形で会場を後にした。最後まで集会を見届ける気はなかったし、彼女が立ち上がったのがちようどいい合図のような気がした。

空には星がいくつか見え始めていた。

数十メートル先を行く女の紺のワンピースが、暗くなりかけた周囲の空気の中で、ひととき鮮やかに浮かび上がり、まるで僕を先導しているかのようにだった。

ふと「ブルキニエ現象」という専門用語を思い出した。

朝晩の薄暗闇の中では、赤系統のものはくすんで見え、青系統のものは鮮やかに見える、という現象のことだ。中学の美術の時間に、菊地先生から教わった。夕方見かける制服の女子学生が眩しいのはそのせいかと、妙に納得したのを覚えている。

女は海岸沿いの道路に出て、松林のそばに駐車している暗色のワンボックススクーターの前まで行って止まった。レジャー用のワンボックスカーよりは一回り大きく、色が暗いせいもあって、四人護送車のように見える。

先導役が止まってしまったので、僕も足を止め、道端に立ち尽くしたまま彼女を見ていた。

彼女は後部座席のスライド式ドアを開け、開口部の床に座り込んで、両脚を真っ直前に投げ出した。どうやら脚を投げ出して座るのが癖らしい。

「今夜は一雨くるかもしらんなあ」

ふいに背後で声がした。振り向くと、さっきの長身の男だった。彼の連れらしき女を離れた場所からじっと見つめていたのを

知られて、僕はその場をどうとり繕ったらいいか分からず、慌てた。

「星が出るのに、何を妙なこと言うちよるんや思うてまっしやる？ じゃっどん、あたいにや分つかのさあ、ハハハ、フフン、ホロホロン……」

一体どこ出身だか分からないような滅茶苦茶な言葉。おまけに、異様な節回しでハミングまでし始めたこの男は何者なのか。

小さなパンダとコアラが交互に並んでいる柄の黄色いシャツの趣味は尋常ではないが、派手な指輪をしているとか、先の尖ったエナメルの革靴を履いているといった、いわゆるヤクザファッションとも違う。

年齢もよく分からない。

三十代だろうか。どこか無国籍風の風貌。もしかしたら日本人ではないのかもしれないと思ったが、言葉遣いが滅茶苦茶なわりには、アクセントやイントネーションは外国人風ではない。

呆気にとられている僕に向かって、男はさらに話しかけてきた。

「お兄さん、哲学者だねえ。オイラにや分かるよ。何も言わなかったって、私にはよおーっく分かるの」

一人称がコロコロ変わる。無意識にそういう話し方になって

いるのだとしたら、やはり普通ではない。

「兄さん、悩んでるね。言い様のない虚無感に襲われとるぎゃあ。感受性が強いんやねえ。温もりが欲しい。嘘のない優しさが欲しい……そうでしょ?」

男は青いメタルの丸眼鏡の奥で、虹彩の小さな目を光らせながら言葉を続けた。

僕はその唐突な問いには答えず、視線を女のほうに戻した。

彼女は相変わらず両脚をまっすぐ投げ出して車の床に座っていたが、僕と視線が合うと、妖しげに微笑んだ。「プルキニエ現象」で周囲の薄い闇から浮き上がる紺色のワンピース以上に、その微笑みは眩しかった。

「マリアって言いますのんや。ええ子でっせえ。きつとお客はんのデリケートな心も、しっかり包んでくれる思いますワ」

「お客さん?」

僕は思わず訊き返した。

「あいやあ、失礼。兄さんとあんまり心がびったり通いおうてしもたんで、口が滑っちゃった。いや、驚くよねえ、いきなりこんなふうに話しかけられたらねえ。アタシだつて信じられないんだわさ。ホント。こんなところで兄さんのような哲学的な人に会うなんてさ」

「哲学的? 僕はただのコックですよ。この先のホテルの」

「いや、職業は関係ないの。問題は心ね。ボクたち、心のきれ

いな人しかお客さんを選ばないから」

「お客さんつて……どんな商売ですか?」

すでに多少の予測はついていたのだが、思いきつてそう訊いてみた。

男は小さな目を細くして微笑むと、待つていましたとばかりに続けた。

「心を包んで、地球を共感する仕事ですワ。いや、あんなしょうもないイルカショーとは違いまっせ。インチキはなし。精一杯の思いやりと温もりを通い合わせるべく、誠心誠意、努力させてもろうてます。人間は御飯だけ食べて生きてればいいつてもんでもないでしょ? 何かと一体になりたい。心の底でいつもそう願うておつても、ほんまもんのコミュニケーションちゅうのは難しいわけ……」

「すみません。何を言っているのかよく分かりません。具体的にはどういうことですか?」

放つておけばいつまでも喋り続けそうなので、相手の言葉を遮るに足りる程度にはつきりした口調で訊いた。

「はいな。具体的に……ね。マリアちゃんは特殊な才能の持ち主ですわね。人を幸せにする才能を持つとるんですよ。これにかけてはもう天才じゃき。聖母マリアもかくあるやと思わせる懐の深い温もり……あ、お客さん、具体的な表現がお好みなんよね、ハイハイ。具体的にはですわね、絶対に暴力は駄目。

せやけど決して損はさせませんよって、二万円ポッキリで、どうです？」

やはりそうだったのか。

要するに、極めて風変わりではあるが、ポン引きなのだ。それにしても、新宿の雑踏や熱海の温泉街ならいざ知らず、四国の海岸の、しかも自然保護団体のパフォーマンスショーの会場になぜ？

「そんなつもりは全然ないし、今、持ち合わせもないから……」

そう言った後で、もつと強い拒絶の仕方をすべきだったと後悔したが、男はあつさり引き下がった。

「そうよねえ。ちよつと無理があるよねえ。分かっではいたんだけど、ちよつこしお願いしてみただけじゃけん、気にせんといてえな」

男はそう言うのと、別れの挨拶代わりに、軽く右手を挙げた。車のほうを振り向くと、女はまだこつちを見て微笑していた。

二、三秒間、僕は無言で彼女の笑顔を見つめていた。

彼女の笑顔は、僕が知っているどんなタイプの美人のそれとも違っていた。その意外さが妙に心地よい。

しかし、一方では、今、男と交わした会話からくるある種の偏見と軽蔑が、その素直なときめきを曇らせていた。

心が混乱したまま、仕方なく男から離れ、ホテルに向かって歩き始めた。

車の横を通り過ぎるとき、女がそつと声をかけてきた。

「ごめんなさいね」

「いいえ」

反射的にそう返事をしながらも、何か後ろ髪を引かれる思いで、うつむき加減に彼女の前を通り過ぎた。

顔の識別ができないほどの距離になってから振り返ると、二人はさつきと同じ位置で、同じポーズのまま僕を見送っていた。

▽

シーサイドホテルニュー土佐という長い名前の観光ホテルは、そこからさらに十分ほど歩いた場所にある。

規模は小さかったが、この辺には民宿が数軒あるだけで、観光ホテルと呼べるようなものは他にはない。

二年前に建てられたそうで、外観はきれいだったが、真夏の最盛期でも満室になることは滅多になく、早くも経営を心配する声がホテルの内外で上がっている。

その日も客はあまりいなかった。

九月に入ったばかりの平日だし、ほとんど開店休業状態でもおかしくはないのだが、あの集会への参加者の一部が泊まっているのだらうか、何部屋かの予約が入っていた。

厨房や配膳室ではいつも通りの作業が行われている。

昨日まで、僕もその中にいた。厨房の大鍋で客の人数分の味噌汁を作り、海老フライを揚げていた。だから夕方この時間、

厨房の外にいるのがなんとも落ち着かない。

支配人に辞めたいと言ったのはつい昨日のことだ。ちょうど二三歳の誕生日だった。

彼は別段慌てるふうでもなく、「じゃあ、切りがいいから今日付けで辞めてよ。残りの給料は明日の夜までに用意しておくから」と答えた。

夏休みも終わり、これから暇になる時期だし、向こうとしてはいいタイミングだったに違いない。

毎週月曜の午後、彼は土佐市の銀行へ行き、金の出し入れを済ませ、社長のところに一週間分の収支報告をする。帰り道、愛人の所へ顔を出し、決まって夜の十時に戻ってくる。

そんなわけで、僕は彼が金を持って戻ってくる夜十時まででは、時間を潰しながらここで待っていないければならなかった。

客でもなく、従業員でもないという立場でホテルにいるのはひどく居心地が悪い。

こんなことなら、無給でもいいから、今夜は最後の仕事をすべきだった。チーフにもそう申し出たのだが、客もあまりいないからいいと、あっさり断られてしまった。それで、時間潰しに、近くの海岸でやっているという妙な集会を覗いてみる気になったのだった。

夕食後、一応みんなに挨拶をしに回った。

配膳室では仲居の有紀さんが客の食べ残した料理を片づけて

いた。僕の顔を見るなり、彼女はまるで咎めるような口調で言った。

「てっちゃん、辞めるんだって?」

「はい。昨日付けでもう……」

僕はちよつと口ごもりながら答えた。

有紀さんは、まだかすかに動いている鯛の活き造りを、無造作にポリバケツに放り込んだ。高額コースの客の夕食にはこれが出るのだが、中にはまったく箸をつけない客もいる。そうしたきれいなまま戻される活き造りを、仲居さんたちは

「犬死皿いぬじにざら」と呼ぶ。

「寂しくなるね」

有紀さんが手を休め、まじまじと僕の顔を見つめた。

「ええ。いろいろお世話になりました」

僕はありきたりの挨拶を返した。厨房はすでに掃除も済み、チーフが一人で残っていた。

なぜか彼は板長とかコック長ではなく、「チーフ」と呼ばれていた。

もともとは料亭の板前だったそうだから、安っぽい横文字で呼ばれることを快く思っていないのではないかと想像するのだが、口数の少ない彼からそういう愚痴を聞くことは一度もなかった。

「どうだった? ナントカって集まりは」



チーフは僕の顔を見るなりそう言った。

この人が自分から先に口を開くことは珍しい。別れの挨拶を意欲した会話をしたくなかったのかもしれない。

「訳の分からないイルカショーでした」

「イルカか……。あれは美味しい。新鮮なうちなら刺身がいちばんだな」

彼はそう言いながら、厨房の隅に置かれた鯛の水槽に目をやった。そこには近日中に活き造りにされる運命の鯛が十数匹、窮屈そうに泳いでいる。

「お世話になりました」

「別に……」

チーフはそつげなくそう答えた。彼にはもう少し何か言わなければならぬという気がしたが、適当な言葉が思いつかなかった。

「それじゃあ、失礼します」

「ああ」

結局昨日までと同じ挨拶を交わし、僕は厨房を後にした。

▽

支配人はいつも通り、十時ちょうどに戻ってきた。

支配人から金の入った茶封筒を受け取ると、僕は封筒の中身をちゃんと確かめることもせず、小銭だけ財布に入れ、残りの札は封筒に入れたままズボンのポケットに押し込んだ。

部屋に戻り、すでにまとめてあった荷物を持ち出して自転車の荷台に括りつけ、海沿いの道へと出ていった。

なにも夜中に出ていくことはなさそうなものだが、居心地の悪さがピークに達し、一刻も早くこのホテルから遠ざかりたかった。

町まで出れば、二四時間営業のラブホテルがある。そこで少し眠って、朝一番の列車に乗って東京に向かうつもりだった。

そのとき、雨が降り始めていることに気づいた。空を見上げると、真っ暗だった。夕方海岸で見た星のことと、長身の妙な男が言っていた言葉を思い出した。

「星が出るのに、何を妙なこと言うちよるんや思うてまつしやる？ じゃつどん、あたいにや分つかのさあ、ハハハン、フフン、ホロホロン……」

あの男が言っていた通りだ。

ほとんど走らぬうちに、雨は本降りになり、遠くで雷鳴まで聞こえ始めた。

仕方なくホテルに引き返そうとしたとき、前方の道端に夕方会った奇妙な二人組の車が停まっているのが見えた。

脇に自転車停め、中をそつと覗いた。

運転席には誰もいなかった。後部の窓はカーテンがかかっていて、中の様子は見えない。

「お金ができたんですけど」

そんなふうには言え、彼らほ今からでも僕を「客として迎え入れてくれるだろうか。

この雨の中で、ずぶ濡れになったままあの女と抱き合う自分を想像してみた。

……バカな！

なんという想像をしているんだ。警戒心を抱くのが普通ではないか。

怪しい二人組、ポケットの中にはひと月分の給料が入った封筒、ひとけのない闇夜……犯罪の御膳立てはすべて揃っている。

そう思ったとき、横の松林の中で懐中電灯の灯りが揺れ、人が息を切らして近づいてくる気配がした。

あの二人だった。

「やっぱ油を入れて、逃げる用意をしてからのほうがよかつたんちゃうか？」

「でも、このへんガソリンスタンドなんかないよ。それにこんな時間だし」

「ほなら逃げられへんやんけ」

二人はそんな会話を交わしながら車に乗り込もうとし、突っ立っている僕に気づいた。

二人は相当驚いたようで、一瞬身体をこわばらせたのが分かった。

そのとき、女が持っていた懐中電灯の光が車に反射して、男

の手元がかすかに見えた。

僕は鼓動が止まるほどの戦慄を覚えた。男の手には、刃渡り一五センチもあろうかというナイフが握られていた。

逃げなければ！

そう思い、自転車へのペダルに足を掛けた途端、緊張と雨のため足が滑り、僕はその場に思いきり転倒した。

「大丈夫？」

女が駆け寄り、上から覗き込む。

「あら、さっきのお兄さん？」

「どうしたんや。平気か、兄さん」

男も近づいてきた。右手にはナイフを握ったままだ。僕は必死で身体の上に被いかぶさっている自転車をどけて立ち上がるうとしたが、右足に痛みが走って動けなかった。

しかし男は襲ってはこなかった。

ナイフを運転席に置くと、自転車をゆっくり起こしにかかった。

「大丈夫？」

女の手が、僕の右足に触れる。

「血が出るわ」

どうやら自転車のどこかに足を引っ掛けて脛を切ってしまったらしい。しかし痛みはむしろくるぶしに集中している。

捻挫したらしい。

男の手を借りてなんとか立ち上がり、とりあえず車の後部の床に腰を下ろした。

男が車のルームライトをつけた。

「痛い?」

女が心配そうに覗き込む。

紺のワンピースは雨に濡れて身体にびったりとまとわりつき、まさにさつき僕が想像していた姿だった。そんな彼女の艶めかしさに息をのみながらも、頭では自分が襲われる可能性について計算し続けている。

緊張と興奮とで、僕の身体は軽く麻痺し始めていた。

「傷の手当てをしなくちゃ」

女に招き入れられる形で、僕は車の後部座席に座らされた。

ルームライトに照らされた車内は、実に奇妙な造りだった。

運転席の後ろには薄い壁が作られていて、壁には横長の窓が開いていた。窓にはカーテンが付けられていて、これを閉じれば運転席と後部荷室の空間はほぼ完全に仕切られる。

後部荷室は最後部の片側に小さな補助シートが一座残されただけで、他のシートはすべて取り外され、代わりに僕が今座っている簡易ベッドのようなものが縦に取り付けられている。

どう考えても普通の改造ではなかった。車を使った移動売春……僕の頭の中で、薄暗く、重苦しいイメージが広がった。

「兄さん、やっぱり戻ってきはったね」

外から男が声をかけた。

「いえ、僕はただ町まで行く途中で……」

「町に行くの? じゃあ、乗ってよ。でも、ガス欠でさ。軽油ないかのう。あ、灯油でもよろしいで」

「あ、あります……」

「え? ほんと?」

女が嬉しそうな声を上げた。

「はい。ホテルの裏の灯油タンクに……」

なぜそんなことを言ったのか、よく分からない。しかし、とっさにそう答えてしまっていた。

「よっしゃ、決まり! その灯油が代金わりや。やっぱり兄さん、頼りになるやんけ」

「ほんと、救いの神だわ」

そう言うと、女は濡れた身体で僕を抱きしめ、唇を重ねてきた。

舌先に、柔らかな温もりが伝わってくる。雨の滴なのか、彼女の体液なのか分からないまま、僕はその甘い潤いの快感に圧倒されていた。

「リアちゃんの温もり、伝わりますやろ? そのささやかな温もりで灯油二リットルばい。オイラ、とっってくるさかい、場所を教えてえな」

僕は仕方なく、男に灯油タンクの場所を教えた。

男は僕の自転車の荷台から荷物を下ろすと、代わりに小さなポリタンクを括り付けて、雨の中をホテルの方に走り出した。

あとには僕と女が残された。

女は補助シートの脇の木製ケースから、タオルを一枚取り出した。

「脱いで」

「え？」

「びしょびしょ。脱がなくちゃ風邪をひくわ。脱いだらこれを着て」

女は屈託のない笑顔で、タオルと一緒に木綿のガウンを差し出した。

女の手が僕の胸元に伸び、シャツのボタンを一つ一つ外し始めた。その慣れた手つきが、脳裏に広がっていた暗いイメージに追いつきをかけた。

やはり「プロの女」なのだろうか……。

しかし、そんな僕の心の動揺とはまるで無関係に、彼女はてきぱきと僕のシャツを脱がせ、タオルで濡れた身体を拭き始めた。

偶然の出会いに対して勝手に抱いていたときめきと、「プロの女」という偏見が適度に中和された上で、僕は急に、このまますべてを彼女に委ねたい衝動に襲われた。

乾いた木綿の肌触りと、時折触れる彼女の指先の感触に負け

ただけかもしれない。

捨てばちの疲労感……。

僕は覚悟を決めた。こんな訳の分からない状況の中、多少計算したところで始まらない。ここで殺されたとしても、それはそれで運命だ。いや、ひよつとしたらこれは長くてリアルな夢なのかもしれない。

思いきってズボンも脱ぎ、ガウンを羽織った。

よく見ると、ガウンには大きく「二人の秘密」と書かれている。どこかのラブホテルの備品を持って来たのだろう。

「ピンクのと青のと二つあるんだけど、青いほうがよかったです？」

女が言った。もちろんどっちだっていい。第一、暗くて色なんかよく分らない。

「贅沢は言いませんよ」

余裕を装って、僕はそう答えた。

女はニッコリ笑うと、血がにじんでいる僕の脛を消毒し始めた。消毒液が少し沁みた。

濡れたワンピースの襟から、雨の滴がついたままの白い胸元が覗いている。しかし、もちろん僕には欲情するほどの余裕はまだない。

錯綜した気持ちで女の胸元を見つめているうちに、傷の手当は終わっていた。

冷静さを装って、こう言ってみた。

「あなたも脱がないと風邪ひくんじゃないですか？」

「うん。じゃあ、私は青いのを着るわ」

女は中腰のまま車の後部に行くと、僕の服を脱がせたよりも手早くワンピースを脱ぎ、ガウンを羽織った。薄暗がりの中で、柔らかそうな乳房が揺れるのがかすかに見えた。

しばらくして男が戻ってきた。うまく灯油を盗み出せたようで、給油口を開け、灯油を入れている気配がする。

給油が終わると、男は僕の自転車車を車の後部キャリアにくくりつけた。

やがてエンジンがかかる音がして、車が揺れた。

……ああ、もう逃げられない。

ゆっくりと車が動き出す。

運転席から。はははん、ふふふんという男の鼻歌が聞こえてきた。

ガウンをまとった女が、僕の隣に寄り添うようにして座ってきた。

「あの……さっき、一体何をしていたんですか？」

そう訊いた自分の声がかすれていた。ひどく喉が渴いていて、声を出すと声帯が痛む。

それに気づいたのか、女は返事をする前に物入れの申から何やら瓶を取り出し、栓を開けて差し出した。

警戒心より喉の渴きが勝っていた。受け取った瓶の中身をラッパ呑みする。

液体が喉元を通り過ぎてからしばらくして、ようやく赤ワインだということに気がついた。

「お水が切れちゃってて、これしかないの。お金がなくなっちゃって、何も仕入れられなくて……。油貰えて、本当に助かったわ。あ、油の分、ちゃんとお札をしなくちゃね」

そう言うと、女は僕の肩に手を回し、身体を寄せてきた。その身体は僕よりもさらに冷えきっていた。

純粹な肉欲と、その身体の冷たさへの愛しさが入り混じった気持ちで、僕は彼女の身体を抱きとめた。僕の身体に蓄積された微熱が、木綿のガウンを通して、少しずつ彼女の側に移っていく気がした。

体温を奪われているはずなのに、なぜか身体も心も温まっていく。気持ちごとく安らいでいく。

車は細く曲がりくねった道をゆっくりと走り続けていた。国道に出るまでは、他に道はない。窓の外は見えなかったが、大体の地理は把握できる。

僕は彼女の身体をそばに感じたまま、ワインをもう一口呑んだ。喉が潤った分だけ、また少し余裕が出てきた。

さっきの質問はとりあえず後回しにして、改めてこう訊いてみた。

「ご夫婦なんですか？」

「えーっ？ 私とデンチが？ まさかあ」

「デンチ？」

「あ、まだ言つてなかったつけ。伝言の伝に、地球の地つて書くの。でも、本名じゃないのよ。私がデンチ、デンチつて呼んでたから、本人がそれらしい漢字をあてて自分の名前にしちゃったの。なんでデンチなのかっていうとね、いつも乾電池の残りを気にしているからなの。電池の捨て方にもうるさいんだよ。使えなくなった電池はビニール袋に入れて溜め込んで、通りかかった町の電池の回収日を調べて、ゴミ捨て場に出すの。そのために電池の回収の日までその町にいたりしてね。でも、いつも回収日の前に逃げなきゃならない羽目になって……」

女はなぜか楽しそうにしゃべり続けたが、僕には話の内容の半分も理解できなかった。

「……寒くない？」

黙つて聞いている僕に、女が訊ねた。

「少し。でもあなたのほうがもつと寒いんじゃないですか？」

女は微笑すると、赤ワインの瓶を取つて、ゴクンゴクンと喉を鳴らしながら呑んだ。

「お燗するともつと暖まるんだけどねー」

「ワインのお燗？」

「おいしいんだよ。私ね、マリアっていうの」

どうもこの女の話は脈絡に落ち着きがない。少し頭が足りないのかもしれない。

「マウラって書いてマリア」

「え？」

「真後ろの真に、裏口の裏。裏は英語でリアでしょ」

「冗談みたいな名前ですね」

「そ〜お？ お母さんは真面目につけたんだと思うよ」

「え？ 本名なんですか？」

「そうよ。名字は海野。でも、お父さんは多分、ミノワって人。それも、デンチがそう言つてただけで、証拠はないんだけどね」  
訊いたことに答えず、どんだん訳の分からないことを言い出す。

おかげで僕は混乱しっぱなしだった。

でも、細かいことはどうでもいいんじゃないかという気になり始めてもいた。

男——デンチが言っていたように、マリアには孤独を癒す不思議な才能があるのかもしれない。彼女がこうして隣にいてくれるだけで、心がどんだん暖まっていくな。

僕は簡易ベッドの上に横になった。

マリアも隣に身体を横たえてきた。

えっ？

鼓動が早くなったのが自分でも分かった。

緊張を気づかれぬように、僕は両手を頭の後ろに組み、リラックスした素振りを装った。

「ねえ、さつき一人で海岸のほうに行つてたでしょ。まつ暗なのに。何していったんですか？」

車の低い天井を見つめながら、僕はいちばん気になっていたことをもう一度質問した。

「マリアは、今度は多少まともに答えてくれた。」

「サブちゃんを逃がしてきたの。あ、サブちゃんというのはイルカの名前。ほら、あなたも見ていたでしょ？ 夕方のショーの」

「ああ、あれね。そもそも何だったんですかね、あれは？」

「話せば長くなるのよね。聞きたい？」

「ええ。とつても」

「山彦塾っていうあのグループにはね、政府や秘密組織が裏で関係しているの」

「秘密組織って？」

「秘密の組織」

「だから、どういう？」

「世界を陰で操っている人たちの集まりっていうか……秘密組織っていえば、そういうのでしょ。たいていは」

「たいていは、って……そうとは言えないだろうけど……」

「やれやれ。ようやくひとつの質問に答えてくれたかと思つた

ら、今度はカルトかトンデモ路線か。」

でも、別に苛立ったりはしなかった。クロスワードパズルを解くように、少しずつ、時間をかけて話を聞いてみたい気がする。

「じゃあ、話がややこしくなる前に、まずそのイルカ救出作戦の話から教えてくださいよ。どうして逃がしたの？」

「食べられちゃうからよ。サブちゃんはね、もう歳なの。水族館にいたんだけれど、ジャンプも高く跳べなくなつたし、もうほとんど隠居状態だったのね。しかもその水族館、今年の夏限りで閉鎖されてしまったの。それで山彦塾が安く買い取つて、パフォーマンスに利用しようとしたのよね」

「それがなんで食べられちゃうの？」

「このパフォーマンスが終わつたら、東京の料亭に売られちゃうのよ」

「ひどいもんだ」

「でも、本当はもつと違う目的に利用されようとしているの。それも話せば長くなるんだけど……その話はまた今度にしましょ。なんだか私ばかり話しているんだもの。今度はあなたの話を聞かせて」

マリアはそう言うときさらに身体を寄せ、心臓の音を確かめるかのように、僕の左の胸に耳をあてた。

この状態で僕が話せば、マリアの脳には僕の声が奇妙に響い

て届くに違いない。

さて、一体何を話せばいいんだろう。

改めて自己紹介？

名前は……てっちゃん。長いこと本名で呼ばれた記憶がない。

本名は……哲義。山本哲義。

呆れたことに、僕はそのとき、本当に自分の名前を忘れかけていた。頭の中で確認してから、ようやく口にする。

「ヤマキ・テツヨシ……あ、これ、名前。僕の」

「てっちゃんね」

字の説明さえさせずに、マリアは即座に僕を昨日までの呼び名に戻してしまった。

僕が「山本哲義」に戻れたのは、ほんの数秒だったわけだ。

そう思った途端、無性におかしくなって、声を出して笑ってしまった。

マリアの耳が、揺れる身体に合わせて、僕の左の乳首をくすぐった。

「何かおかしかった？」

マリアは耳を僕の胸から離さずに訊いた。

「ううん、何でもない」

「それで、歳は二三で、仕事はコックさん？」

「えっ？ なぜ知ってるの？」

驚いて訊き返した。彼女のペースにはまって、言葉遣いもく

だけだった。

「だって、デンチが言ってたよ。哲学的なコックさんなんだって。

最初に会ったとき、そう言ったんじゃないの？ あのホテルで

コックさんやっっているって」

「そうだっけ？ でも、歳は？」

「歳はあてずっば。私より二つ上くらいだとベストだなんて思っ  
て」

何がどうベストなのか分からなかったが、どうやら超能力者  
というわけではないようだ。

車がきついカーブを曲がり、大きく傾いた。

二人に対する僕の警戒心は、かなり解けてきていた。

このまま朝まで走り続けてくれればいいのにと、心の中で

願った。そうすれば、男の存在を忘れたまま、マリアとずっと  
話してられる。

「コックさんって、お魚を生きたまま料理したりもするんで  
しょ？」

マリアがぼそつと言った。

やはり多少超能力を持っているのだろうか。まさにその問題

で僕はあのホテルの厨房を去ったのだった。

あまり他人には言いたくなかったが、イルカの話といい、ど

うも話の流れがそういうほうにきてしまっている。

僕は質問に答える代わりに、簡単に自分の生い立ちを話して



みることにした。

鰻屋の件として生まれたものの、どうしても生きてきた鰻を裂けなくて、後継ぎにしようとしていた親父の期待を裏切ったこと。それがもとで、一八の誕生日に家を出て、以後、冬はスキー場の民宿、夏は高原のペンションというふうには渡り歩きながらコックの修業をしていること。合宿免許の合宿所でコックをしたときに、給料代わりにただで免許を取らせてもらったけれど、車を買う金はないので、移動するときは自転車旅行だということ。

マリアは黙って僕の身の上話に耳を傾けていた。調子よく相づちなどを打ってくれないことが、僕としてはかえって嬉しかった。

しかし、そこまで言って、僕もまた、マリアの質問にちゃんと答えていないことに気がついた。

一呼吸おいて、こう言った。

「今は時々生きてる魚も料理するようになったよ。でも、活き造りってやつはどうしても駄目だし。あのホテルではチーフに何度も怒鳴られた。それで辞めたようなものだね」

マリアは僕の胸の上でこっくりと頷いた。それで十分だった。

僕は身の上話をするのがあまり好きではないが、今回だけは不思議に気持ちが悪くなった。

車が大きく揺られて、道路から外れていくのが分かった。僕は

身体を起こし、窓の外を見た。車はどこかの海岸に降りていくところだった。

車は砂浜のそばに停まった。僕は反射的にマリアから身体を離れた。

ヘッドライトが消され、エンジンも止まった。再び闇と静寂が戻る。間仕切りの窓からは、マップランプらしい光がかすかに漏れている。

その窓を通して、デンチの声がした。

「お客さん、今夜はここで野宿させてね。町は目の前じゃけんど、この時間開いているスタンドはないやろし、夜が明けたらお望みの場所で降ろすからさ」

「お客さんじゃなくて、てっちゃんよ」

マリアが言った。

「てっちゃん？ あ、そ。じゃあ、てっちゃんさん、今夜はマリアちゃんといふ夢見てちょうだいな。オイラは運転席で一人寂しく寝るからさ。どうぞごゆっくりねん」

そう言われても、はいそうですかとくつろげるわけもない。

車が動いているときは安心だが、運転をしていないとなればいつ何をされるか分からない。あのナイフはどこにしまったのだろうか。

僕はしばらく運転席の気配を窺っていた。

マリアが僕の肩に手を置いて言った。

「寝る？」

どっちの意味なのか分からなかった。

僕は暗がりの中で目を凝らした。

マリアが着ているガウンが目の前に白っぽく浮かび上がる。

欲望が頭をもたげ始めたが、薄い壁一枚隔てたところに正体

不明の男がいる状況で、彼女に手を出す勇氣はやはりなかった。

海はすぐそばらしく、雨の音に混じって潮騒がかなり大きく

聞こえていたが、窓の外を見ても何も見えない。

突然、運転席からソプラノサクスのような音が聞こえてきた。

一瞬ラジオかと思ったが、そうではないようだ。

「あれ、何？」

僕は声を潜めてマリアに訊いた。

「デンチの寝る前の練習。すぐに終わるわ」

僕は間仕切りの窓から、そっと運転席のデンチを覗いた。

狭い運転席で長身を折り曲げるようにして、彼は黒いサク

スのようなものを吹いていた。一種の電子楽器らしい。

「あのおもちゃのためにいつも電池の残りを気にしているの。

単三で言うの？ 細いやつね。あれを六本使うのよね」

デンチが吹くその電子楽器の音色はひどく物悲しく、メロ

ディは途切れがちだった。

「デンチはね、サククスプレーヤーになるのが夢だったの。で

も肺を一部切り取っちゃって、諦めたんだって」

僕は彼に気づかれなないようにそっと窓から離れ、再びベッドに腰掛けた。

雨はやみそうになかった。

デンチが吹くメロディは、車の外に漏れて水分をたっぷり

吸って重くなり、海に届く前に、に砂浜に落ちて地中に染み込

んでいく。

そんなことをぼんやりとイメージしているうちに、次第に頭

が重くなってきた。

「寝る？」

耳許でマリアがもう一度囁いた。

やっぱりどっちの意味か分からない。

僕はそれを確かめることなく、「うん」と返事をして横になっ

た。

身体がふっと浮き上がったような気がした。マリアが今どん

な表情をしているのか確かめようとしたが、首を回す程度の力

も入らない。

緊張の持続が限界に達したのか、それともマリアが僕に催眠

術でもかけているのか……。

ようやくほんの少しだけ首を回して、マリアを見た。

マリアは座ったまま、僕のほうを見ていた。でも、暗くて表

情までは分からない。

欲望よりも、睡魔のほうがはるかに勝っていた。眠りに落ちる寸前、遠くでイルカが鳴く声が聞こえたような気がした。

でもそれは、デンチがああ楽器を吹き損なって出した電子音だったに違いない。

## II

翌朝、僕は一人で寝坊をした。

目を覚ましたとき、車の中に二人はいなかった。

起き上がるとき、右の踝の痛みが甦った。

見ると、少し腫れているが、大したことはなさそうだ。

車の外に出ると、日はすでに水平線上五度くらいの高さに上っていて、直視できないほどの光を放っていた。

雨はすっかり上がっていた。

朝日に照らされる車を見て、僕は初めてこの車が濃い青緑色をしていたのだと知った。

ルーフキャリアの端を利用して、濡れた衣類が干されていた。その中には僕のシャツとズボンもある。すぐにズボンのポケットに入れてあった札のことを思い出した。

吊されているズボンのポケットを確認したが、金はなかった。

車の中を捜したが、目に見える範囲に給料袋はなかった。

二人はどこへ行ったのだろう。

車の後部から、自転車のタイヤの跡が砂の上についていて、それにそって二人のものらしい足跡が道のほうに向かって伸びていた。

やがて、デンチが僕の自転車に乗って現れた。

「モーニン、てっちゃん」

「どーも……」

間の抜けた返事をしてしまったが、こんなとき明るく「お早うございます」と言うわけにもいかない。

まず金を取り戻すことを考えなければならなかった。

暴力をふるわれる危険はもうあまり感じていなかったが、一応少し時間を書いて、相手の出方を探ることにした。

デンチは自転車の荷台から小さな紙包みを外すと、中から魚の干物を出して見せた。

「朝ご飯。入手方法は訊いちゃイヤよ」

各地の方言だけでなく、オカマ言葉もレパートリーに入っているらしい。

「リアは？」

呼び捨てにしているものかどうか少し迷ったが、彼らが最初からラフな態度なのだから、こっちもそれに合わせることにした。